６　「」 ─近世の俳文

21年度　関西学院大学

★　左の文章は、芭蕉の弟子であるが、芭蕉の死に際し、師の句などを随所にちりばめつつ、師の晩年をまとめた俳文の一節である。これを読んで、後の問に答えよ。

　そもそもこの翁、孤独貧窮にａして、徳業にｂとめること無量なり。①二千余人の門葉、辺遠ひとつに合信する因と縁との不可思議、いかにとも勘破しがたし。天和三年の冬、川の草庵急火にかこまれ、潮にひたり、苫をＡかづきて、煙のうちに生きのびけん、ｃこれぞＢ玉の緒のはかなき初めなり。ここに如火宅の変を悟り、ｄ無所住の心を発して、その次の年、夏のなかばに斐が根にくらｅして、②富士の雪のみつれなければと、それより「三更月下無我に入る」といひけん、昔の跡に立ち帰りおはしければ、人々うれしくて、焼原の旧草にｆ庵をむすび、しばしも心とどまるにもとて一かぶの芭蕉を植ゑたり。雨中吟「芭蕉Ｃ野分してｇに雨を聞く夜かな」とｈ侘びられしに、堪閑の友しげくかよひて、おのづから芭蕉翁とよぶことになむなりぬ。

　そのころ円覚寺和尚と申すが、にくはしくｉおはしけるによりて、ｊうかがひ侍るに、ある時翁が本卦のやう見んとて、年月時日を古暦に合せｋせられけるに、萃といふ卦にあたるなり。是は一もとのＤ薄の風に吹かれ、雨にしをれて、うき事の数々しげくなり　Ⅰ　ども、命つれなく、からうじて世にあるさまに譬へたり。③されば「あつまる」とよみて、その身はひそかならんとすれども、かなたこなたより事つどひて、心ざしをやすんずる事なしとかや。まことに聖典の瑞を感じける。ｌさのごとく草庵に入り来る人々の道をしたへるあまり、とにもかくにも慰むれば、所得たるかな、橋あり、舟あり、林あり、塔あり、「ｍ花の雲鐘は上野か浅草か」と眼前の奇景も捨てがたく、おのおのがＥせめておもふも、むつまじく侍れど、古郷にいささかしのばるる事ありとて、享初めの年の秋、利をともなひ、大和路や吉野の奥も心のこさず、「露とくとくこころみにうき世すすがばや」、これより人の見ふれたる茶の羽織、檜笠になん「④いかめしき音やあられ」と風狂ｎして、こなたかなたのＦしるべ多く、Ｇ鄙の長路をいたはる人々、⑤名をこひ、句をしのぶことｏ安からず聞えしかば、隠れかねたる身を「斎に似たるかな」との吟行に、々徳化して正風の師と仰ぎ侍るなり。近在隣郷より馬をはせてりむかふるもせんかたなし。心をのどめてと思ふ一日もなかりければ、心気いつしかに衰減して、「病む雁のかた田におりて旅寝かな」とくるしみけんその年より、津・の人々いたはり深く、幻住庵・義仲寺、ゆく所至る処の風景を心の物にして遊べること年あり。

　元来根本寺仏頂和尚に法して、ひとり開禅の法師といはれ、気鉄鋳すいきほひなりけれども、老身Ｈくづほるるままに、句毎のからびたる姿までも自然に⑥山家集の骨髄を得られたる、ありがたくや。さればこそこの道なりともてはやして、貧交人に厚く、喫茶の盟に於いては宗鑑が洒落も教へのひとかたになりて、自由体、放狂体、世こぞつて口うつしせしも力なり。篤実のちなみ、風雅の妙、花に匂ひ月にかがやき、柳に流れ、雪にひるがへる。須磨、明石の夜泊、淡路島のあけぼの、杖を引くはてしもなく、に能因、木曽路に兼好、二見に西行、高野に寂蓮、越後の縁は宗祇・宗長、白川に兼載の草庵、いづれもいづれも故人ながら、芭蕉翁についてまぼろしに見え、⑦いざやいざやとさそはれけん、の空もたのもしくや。十余年がうち、杖と笠とをはなさず、十日とも止まる所にては、又こそ我が胸の中を道祖神のさわがし給ふなりと語られしなり。「⑧住みつかぬ旅の心や」、これは慈鎮和尚の「たびの世にまた旅寝してくさ枕ゆめのにもゆめを見るかな」とｐよませ給ひしに思ひ合せて侍るなり。

（注）　＊深川…江戸の地名。芭蕉の草庵があった。

＊猶如火宅…現世は火事で燃えさかる家のように安住できないものだということ。

＊甲斐が根…富士山のふもと。

＊…占うこと。

＊貞享初めの年…一六八四年。

＊知利…芭蕉に学んだ俳人。千里とも書く。

＊竹斎…仮名草子の主人公。芭蕉はかつて、「狂句こがらしの身は竹斎に似たるかな」という句を詠んでいた。

＊大津・…ともに現在の滋賀県の地名。

＊嗣法…仏法の教えを継承すること。

＊一気鉄鋳す…一気に堅固な精神を鍛えること。

＊…唐の大詩人。杜甫。

＊会盟…俳諧の席。

＊現力…今の力。

問１　波線部Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｅ、Ｆ、Ｈの意味として最も適当なものを、次のイ～ホの中からそれぞれ一つずつ選べ。

　　Ａ　「かづきて」

　　　イ　ぬらして　　ロ　つぶして　　ハ　かぶって

　　　ニ　かかえて　　ホ　ひろって

　　Ｂ　「玉の緒」

　　　イ　泉　　　　　ロ　紐　　　　　ハ　宝

　　　ニ　詞　　　　　ホ　命

　　Ｃ　「野分」

　　　イ　稲刈り　　　ロ　落雷　　　　ハ　田植え

　　　ニ　嵐　　　　　ホ　麦踏み

　　Ｅ　「せめて」

　　　イ　熱心に　　　ロ　せっかちに　　ハ　われがちに

　　　ニ　少しだけ　　ホ　ともかく

　　Ｆ　「しるべ」

　　　イ　手紙　　　　ロ　指示　　　　ハ　評判

　　　ニ　知人　　　　ホ　係累

　　Ｈ　「くづほるる」

　　　イ　衰える　　　ロ　ひからびる　　ハ　いたわる

　　　ニ　病む　　　　ホ　捨てる

問２　波線部Ｄ「薄」、Ｇ「鄙」の読み方をひらがなで書け（歴史的仮名遣いを用いても、現代仮名遣いを用いてもよい）。

　　Ｄ＝［　　　　　　　　　　］　Ｇ＝［　　　　　　　　　　］

◎問３　傍線部①「二千余人の門葉、辺遠ひとつに合信する」とはどういうことか。最も適当なものを次の中から一つ選べ。

イ　数多くの信者が集まってこの老僧を世話していること

ロ　数多くの信者が一堂に会して、この老僧の最後を見守ること

ハ　数多くの弟子が独立して全国各地に散らばっていること

ニ　全国各地の数多くの門人が共にこの翁に心酔していること

ホ　数多くの門人が、親しい者もそうでない者も一緒にこの翁のことを信仰していること

問４　傍線部②「富士の雪のみつれなければ」を品詞分解し、その境界を示したものとして最も適当なものを次の中から一つ選べ。

イ　富士／の／雪／の／みつれ／なければ

ロ　富士／の／雪／のみ／つれなけれ／ば

ハ　富士／の／雪／の／み／つれなけれ／ば

ニ　富士／の／雪／のみ／つれ／なけれ／ば

ホ　富士／の／雪／のみ／つれな／ければ

問５　空欄Ⅰには完了の助動詞「ぬ」が入る。適当な形に活用させて入れよ。

　　［　　　　　　　　　　］

◎問６　傍線部③「されば「あつまる」とよみて」とあるが、ここで言う「あつまる」とよむ漢字は何か。問題文から抜き出せ。

　　［　　　　　　　　　　］

問７　傍線部④「いかめしき音やあられ」は芭蕉の詠んだ句の一部であるが、これはどのような様子を言い表したものか。最も適当なものを次の中から一つ選べ。

イ　近寄りがたい雰囲気で読経をしている様子

ロ　屋外の音が聞こえるかどうかわからない様子

ハ　孤独と静寂をさえぎるような音を期待する様子

ニ　笠に霰が当たって激しい音を出す様子

ホ　多くの人が騒ぐ中で、ひっそりと静寂を求める様子

◎問８　傍線部⑤「名をこひ、句をしのぶこと」とはどういうことか。最も適当なものを次の中から一つ選べ。

イ　俳号をつけてもらい、句作のはげみにすること

ロ　俳号をつけてもらったり、句を作ってもらったりすること

ハ　名声をほしいままにし、いっそう句作にはげむこと

ニ　名声をしたって、句を作ってもらうこと

ホ　名声をしたい、句を味わうこと

問９　傍線部⑥「山家集」は誰の歌集か。次の中から一つ選べ。

　　イ　兼好　　ロ　西行　　ハ　宗祇　　ニ　宗鑑　　ホ　定家

問10　傍線部⑦「いざやいざやとさそはれけん」を現代語訳せよ。

　　［　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　］

問11　傍線部⑧「住みつかぬ旅の心や」の解釈として最も適当なものを次の中から一つ選べ。

イ　炭に火がつかない置火燵のように、思い通りにならない旅の生活はもううんざりだ。

ロ　ひとところに住みつくこともなく、自らの持ち物もせいぜい置火燵ぐらいしかない。

ハ　旅の生活を続けていると置き所の定まらない置火燵のような気分がすることよ。

ニ　ひとところに住みついたことのない私には、置火燵や道祖神しか頼れる相手がいないのだ。

ホ　置火燵の暖かさに、私の孤独な心はほんの少しばかり癒されるのだ。

【確認問題】

１　傍線部ａ・ｅ・ｎ「して」の文法的説明として適当なものをそれぞれ次から選べ。

　ア　四段動詞の連用形の一部「し」＋接続助詞「て」

　イ　サ変動詞の連用形「し」＋接続助詞「て」

　ウ　格助詞「して」

　エ　接続助詞「して」

　ａ〔　　　〕　 ｅ〔　　　〕　 ｎ〔　　　〕

２　傍線部ｂ「とめること」とあるが、ここではどのような漢字を当てるか。適当なものを次から選べ。

　ア　止めること　　イ　泊めること

　ウ　富めること　　エ　留めること

３　傍線部ｃ「これぞ」を含む文には係り結びがあるが、完全な形になっていない。どの語をどのように変えれば、完全な係り結びになるか。改めるべき語を抜き出して、正しい形を記せ。

　抜き出した語＝［　　　　　　　　　　］

　正しい形　　＝［　　　　　　　　　　］

４　傍線部ｄ「無所住」の返り点として適当なものを次から選べ。

　ア　無㆑ 所　住　　イ　無㆓ 所 住㆒

　ウ　無㆑ 所㆑ 住　　エ　無　所㆑ 住

５　傍線部ｉ、ｊ、ｋの主語は誰か。それぞれ選べ。なお、同じ記号を何度用いてもよい。

　ア　芭蕉翁　　　イ　其角

　ウ　大巓和尚　　エ　友人

　ｉ〔　　　〕　 ｊ〔　　　〕　 ｋ〔　　　〕

６　傍線部ｐ「よませ給ひし」の解説として間違っているものを次から一つ選べ。

　ア　「よま」は四段動詞の未然形

　イ　「せ」は尊敬の助動詞の連用形

　ウ　「給ひ」は尊敬の補助動詞の連用形

　エ　「し」は完了の助動詞の連体形

【補充問題】

７　傍線部ｆの解釈として適当なものを次から選べ。

　ア　板を並べた住居を建てて

　イ　簡素な小さい住居を離れて

　ウ　粗末な仮の住居を作って

　エ　持ち運びできる住居をたたんで

８　傍線部ｇの状況として適当なものを次から選べ。

　ア　夜中にひどく雨漏りしている状況

　イ　夜間に庭の盥に雨が激しく降る状況

　ウ　激しく降る雨音に聞き入る状況

　エ　盥から水があふれこぼれる状況

９　傍線部ｈの現代語訳として適当なものを次から選べ。

ア　お嘆きになった

イ　お嘆き申し上げた

ウ　お詫び申し上げた

エ　お詫びされた

10　傍線部ｌ中の「さ」の指す内容を四二字で抜き出し、その最初と最後の三字を記せ。

　［　　　　　］〜［　　　　　］

11　傍線部ｍの情景として適当なものを次から選べ。

ア　折り取った桜の枝を集め、雲に見立てて飾っている情景

イ　満開の桜が咲いたように雲が木々を覆っている情景

ウ　遠くの山の頂に見えるものが雲なのか桜なのかはっきりしない情景

エ　一面に咲き誇る満開の桜が雲のように見える情景

12　傍線部ｏの現代語訳として適当なものを次から選べ。

ア　穏やかでないように聞こえたので

イ　不安になるほどに申し上げたので

ウ　安くはないとおっしゃったので

エ　安心できるものはないと聞いたので

【解答】

問１　Ａ＝ハ　Ｂ＝ホ　Ｃ＝ニ　Ｅ＝イ　Ｆ＝ニ　Ｈ＝イ

問２　Ｄ＝すすき　Ｇ＝ひな

問３　ニ

問４　ロ

問５　ぬれ

問６　萃

問７　ニ

問８　ホ

問９　ロ

問10　ＡさあさあとＢ促されたのだろう

評価の基準　Ａ＝３／Ｂ＝７

問11　ハ

【確認問題】

１　ａ＝エ　ｅ＝ア　ｎ＝イ

２　ウ

３　抜き出した語＝なり　正しい形＝なる

４　ウ

５　ｉ＝ウ　ｊ＝イ　ｋ＝ウ

６　エ

【補充問題】

７　ウ

８　ア

９　ア

10　その身～事なし

11　エ

12　イ

【現代語訳】

　そもそもこの翁（＝芭蕉）は、孤独で貧しく苦しい生活で、（それでいて）立派な行いに富んでいることははかりしれない。二千人余りの門人が、全国各地にありながら共に（この翁に）心酔しているという因縁の不思議なことは、明らかにすることが難しい。天和三年の冬、深川の（翁の）草庵が不意の大火に囲まれ（ながらも）、海水につかり、苫をかぶって、（火事の）煙の中で生き延びたという、これが（翁が）命のはかないこと（を実感した）初めである。この体験を契機に現世は火事で燃えさかる家のよう（に安住できないもの）だという世の転変を悟り、現世には安住する家などないという思いを起こして、その次の年、夏の半ばに富士山のふもとに暮らして（いたが）、富士の雪ばかり（では心を慰めるには）思いどおりにならないのでと、それから（以前）「三更月下無我に入る（＝真夜中に月の光の下で我欲のない境地に入る）」と言ったという、昔の（住居の）跡に帰っていらっしゃったので、人々は嬉しくて、（火事で）焼けた野原の昔の草庵（の跡）に（新しい）庵（＝粗末な仮の住居）を作り、少しの間でも心が留まり句を詠む（糸口となる）眺めにもと思って一株の芭蕉を植えた。雨の降る中で吟じた句（で）「芭蕉野分して盥に雨を聞く夜かな（＝嵐が吹き荒れ庭の芭蕉の葉に雨が激しく打ちつける音がする。草庵の中にもひどく雨漏りがして盥を打ちつけ激しい音がする。その音を聞きながら過ごす不安な夜であるなあ）」とお嘆きになったので、（草庵に）通うことができる（なじみの）友が頻繁に通って、（それから）自然と芭蕉翁と呼ぶことになった。

　その頃円覚寺の大巓和尚と申す僧が、易に詳しくていらっしゃったということで、伺いましたが、あるとき翁の本卦（=生年の干支による占い）の様を見ようと思って、年月時日を旧年の暦に合わせて（和尚が）占いなさったところ、萃という卦にあたったのである。これは一本の薄が風に吹かれ、雨にしおれて、つらい事が数々絶え間なくあったけれども、命は何の変わりもなく、どうにかこの世に生きている様子にたとえた。そうであるので（この萃を）「あつまる」と読んで、その身はひそかであろうとするけれども、あちらこちらから出来事が集まり、気持ちを安らかにすることはないとかいう（ことである）。本当に（易の）聖典のしるしを感じた。その（占いの）とおり草庵にやって来る人々が非常に（俳諧の）道を慕う結果、ともかくも（翁の）心を楽しませるので、（翁は）よい所を得たものだなあ、橋がある、舟がある、林がある、塔がある、「花の雲鐘は上野か浅草か（＝雲と見間違えるほど咲き誇る桜の花、その中から鐘の音がかすかに聞こえてくる。あの鐘は上野の寛永寺の鐘か、それとも浅草の浅草寺の鐘だろうか）」と目の前の不思議なほどに素晴らしい景色も捨てがたく、皆さんが熱心に思うことにも、愛着がありますけれども、故郷に少し思い出すことがあるといって、貞享の初めの年の秋、（門人の）知利を伴って、大和路や吉野の奥も思い残すことなく（訪ね）、「露とくとくこころみにうき世すすがばや（＝吉野の西行庵のとくとくの清水は今も変わらずとくとくと滴り落ちている。西行にならってためしにこの清水で俗世間のをそそぎ落としたいものだ）」、これより人が見知った茶の羽織や、檜笠（の姿）に「いかめしき音やあられ（＝激しい音がすることよ、笠に霰が当たって）」と風雅に徹して（旅を続けたが）、あちこちの知人は多く、田舎の遠い道のり（をやってきた翁）を手厚くもてなす人々が、名声をしたい、句を味わうことなど（こちらが）心配になるほどに申し上げたので、（ひそかにと思いながらも）隠れかねる身を「（あの仮名草子の主人公の）竹斎に似ていることだなあ」と（思いながら）木枯らしの（中に）句を吟じながら旅ゆく（翁の様子）に、（人々は）ますます（俳諧の）徳によって感化されて、あるべき正しい風雅の師であると仰いだのでございます。（このような状態であるので）近くの村や隣村から馬を走らせてきて（翁を）迎えるのもどうしようもない。心を静めて（過ごそう）と思う（日は）一日もなかったので、気分はいつのまにか衰退して、「病む雁のかた田におりて旅寝かな（＝病気で苦しむ雁が堅田に舞い降りて思わぬところで独りしく体を休める旅寝であることよ）」と苦しんだというその年から、大津・膳所の人々が手厚くねぎらい、（翁は）幻住庵・義仲寺など、行く所至る所の風景を（眺め味わい、自分の）心の（中に得た）物にして遊行したことが何年かあった。

　元来根本寺の仏頂和尚によって仏法の教えを継承して、（翁）ひとり（が）開禅の法師と言われ、一気に堅固な精神を鍛える勢いであるけれども、老体は衰えるにつれて、それぞれの句が枯淡の趣に見える姿までも自然と「山家集」の主眼を得ている様は、めったにないほど貴重であることよ。だからこそ（人々は）この（＝俳諧の）道の杜甫であるとほめたてて、（一方、翁は）貧しくも親しく交際することは人に手厚く、茶を飲みながらの俳諧の席では宗鑑の洒落も教えの一つの方向となって、自由体、放狂体と、（今までの作風にはない、自由な作風を生み出し、その作風を）世では残らずそろってそのままに口伝えたことも（翁の）今の力である。総じて篤実の縁、風雅の妙は、花に匂い月に輝き、柳に流れ、雪に翻る。須磨、明石での夜の泊まり、淡路島でのあけぼの（というように）、杖をついて旅をすることは終わりもなく、象潟には能因、木曽路には兼好、二見には西行、高野山には寂蓮、越後の縁には宗祇・宗長、白川には兼載の草庵、どの方もどの方も故人ながら、芭蕉翁に取りいて幻に見え、（翁は）さあさあと促されたのだろう、進んでいくその先も心強く（お思いになったことだろう）よ。十年余りの中で、杖と笠を離さず、十日も泊まる所では、再び自分の胸の中を道祖神が騒がしなさるのだと語りなさったのである。「住みつかぬ旅の心や置火燵（＝旅の生活を続けていると置き所の定まらない置火燵のような気分がすることよ）」、これは慈鎮和尚の「たびの世にまた旅寝してくさ枕ゆめの中にもゆめを見るかな（＝この世は旅のようなもの、その世に旅寝して草を枕に夢を見る、その夢の中で夢をみることだなあ）」とお詠みになったことに思い合わせてございます。